

会議名	日本科学飼料協会第 39 1 回月例研究会 「脂質の機能性に関する最近の話題と畜産分野における応用」
開催日時	平成 19 年 11 月 19 日 (火) 午後 1 時 30 分 ~ 4 時
開催場所	馬事畜産会館会議室(東京都中央区新川 2-6-16)
主催者	社団法人日本科学飼料協会
参加人数(概数)	約 60 名
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>講師： 東京農工大大学院共生科学技術研究科 特任准教授 佐藤 幹氏</p> <p>脂質(油脂)は食品・飼料中の主成分の一つであり、「長鎖脂肪酸あるいは炭化水素鎖を持つ、生物体内に存在する、あるいは生物に由来する分子」として、定義されている物質である。食品学・栄養学・飼養学の分野では、従来から高いエネルギー価を持つ成分としてヒト・動物・家畜の成長・維持に使用されている。</p> <p>一方、ここ 20 年で、ある種の脂質が生活習慣病(肥満・糖尿病など)や癌などの疾患に対して抑制作用を持つことが発見され、近年では、ヒトの健康のためのサプリメントとして、脂質の機能性が着目されている。さらに、脂質が、核内レセプターや細胞表面レセプターのリガンドとして、核内レセプターのトランスロケーションの制御分子として、あるいは細胞内シグナルのセカンドメッセンジャーとして機能していることが発見され、脂質代謝だけでなく、糖代謝・蛋白質代謝なども制御する重要な因子として機能していることが明らかになってきた。</p> <p>このことを踏まえて、脂質の消化、吸収および代謝の研究の現状について紹介があった。</p> <p>また現在では、脂質は単なるエネルギーの供給源としてだけでなく、動物の代謝を制御する生理活性物質(機能性物質)としても重要な因子であると、認識されており、代表的に機能性脂質としては、共役リノール酸(抗癌、免疫調節等)、ジグリリド(血中中性脂質濃度低下等)、フェルラ酸(抗酸化)などについて、その機能性の紹介があった。</p> <p>畜産分野に、このような脂質の機能性を応用する場合、畜産物の中に、ヒトに対する機能性脂質の量を増加させ(あるいは付加して)高付加価値の畜産物を生産することおよび機能性脂質を家畜に給与することにより家畜の代謝自体を制御して生産性あるいは品質を高めることの二つの異なる観点からのアプローチが考えられる。前者では、脂質の生産物への蓄積を効率良く行う技術開発が必須であり、後者では家畜の生体内で、機能性を最大限に発揮できるような飼養管理技術の開発が必要であるとの提言があった。</p>

<p>2 .今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>豚と鶏については、畜産物への機能性脂質の移行についてすでに演者が研究を開始しているが、脂質の反芻胃内での挙動(分解・吸収)についての情報が不足しているように感じられた。現段階ではかなり先端的な基礎研究の段階であり、実用化にはしばらく研究蓄積が必要と思われる。したがって、機能性脂質を含む畜産物の生産が経営的に成立するか否かも今後の研究に待つこととなる。</p> <p>効率的な基礎研究(いわゆる目的基礎研究)の発展に期待したい。</p>
<p>3 .その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>特になし</p>
<p>4 .今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>上記2.に記載</p>
<p>5 .会議の所感</p>	<p>かなり基礎的な話題であったが、飼料メーカー等からの出席も多く、現在の飼料業界の状況から、新製品の開発に注目が集まっているように思われた。</p>
<p>報告者</p>	<p>伊藤 稔</p>